

二〇二二年八月二三日

雨音に虫の音が和す朝かな
ぴかぴかに仏具磨いて盆用意
せせらぎの飛沫に光る草紅葉
秋涼し切子グラスに花一輪
割箸の足踏んまへし茄子の馬

二〇二二年八月二二日

旅の吾も阿呆となりて阿波踊
散歩愉し秋雨傘をさすもまた
水田を見回る爺の半ズボン
音高く香を広げゆく草刈機
萍がおしくらをする田の水面
高垣をなして連なる夾竹桃
語らひの途切れて細き虫の声

二〇二二年八月二一日

寄す波の黄金を揉む夕の秋
爽涼の園に気功を習ひけり
朝焼けの薔薇色となる刹那かな
加茂野菜御膳に並ぶ避暑の宿
一茎の背伸びしてをる向日葵田
蝸の峠に続く杉美林

二〇二二年八月一〇日

わが影に遊ぶ池面の赤とんぼ
前足を踏んばる蟻の面構へ
鱈フライ匂へる蟹の路地夕べ
椅子に持て余す昼寝の子らの足
雲海の解けて翼下に駿河湾

二〇二二年八月九日

星月夜途中下車して歩きけり
突風に巻き上げられし秋簾
水遣りのホースの先に虹生る
颱風の風いなしをる鎖樋
涼風を残して俄雨あがる
磨崖仏とりかこみある赤とんぼ
拝殿へ險磴百段蟬しぐれ

二〇二二年八月八日

蓮広葉ニタ分けにして風の道
鯛の声やししじまの間遠より

二〇二二年八月七日

泉水の鯉の後追ふ蜻蛉かな
ががんぼの頼りなき脚壁叩く
立つ秋の露地を曲がれば余り風
真青なる空に浮雲今朝の秋
雲の峰夕日に染まり崩れけり
綺羅波は秋立つ伊吹山の風
海鳴りの砂丘越へ来る晩夏かな

宏 虎

せいじ

凡 士

せいじ

菜 々

智 恵 子

や よ い

み き お

素 秀

ぼんこ

みきお

たか子

満 天

はく子

隆 松

凡 士

毎日句会みのる選・二〇二二年八月一五日

む べ
明日香
智 恵 子
はく子
う つ ぎ
宏 虎
や よ い
せいじ
や よ い
よう子
ぼんこ
あひる
智 恵 子
満 天
あひる
も と こ
う つ ぎ
素 秀
や よ い
みきお
凡 士
そうけい
智 恵 子